

## 2 各主体における現状・課題、そして10年後の姿

### (1) 市民

市民団体に活動している人も、学校に通っている学生も、企業に勤めている人も、家庭に帰れば一市民です。環境問題は、私たち一人ひとりの生活に起因しており、あらゆる世代や立場の人が生涯学習として環境について学ぶとともに、ライフスタイルを見直し、各家庭の中で環境行動を実践することが重要です。また、積極的に地域や市民団体などの環境活動に参加したり、自らの学びや活動を次世代に伝えることが、いのちつなぐまちの実現につながります。

#### 〈現状・課題〉

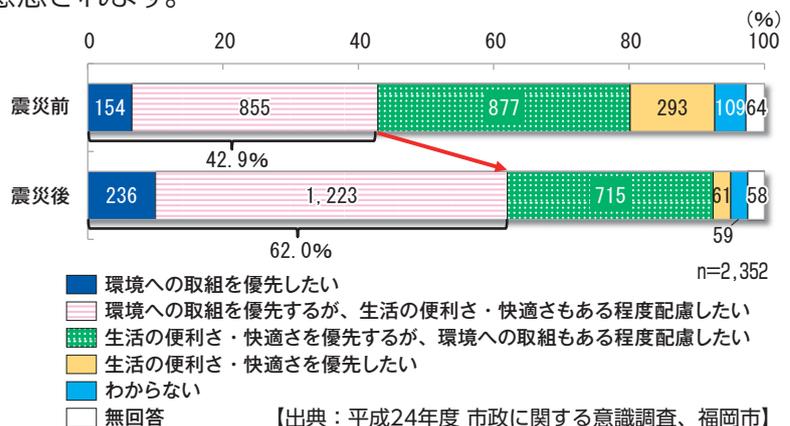
#### ●市民の意識・行動

環境への取組みと生活の便利さ・快適さのどちらを優先したいかという意識調査に対し、環境への取組みを優先したいと回答した人の割合が東日本大震災前後で増加しており、環境への意識が高まっているといえます（図表1）。

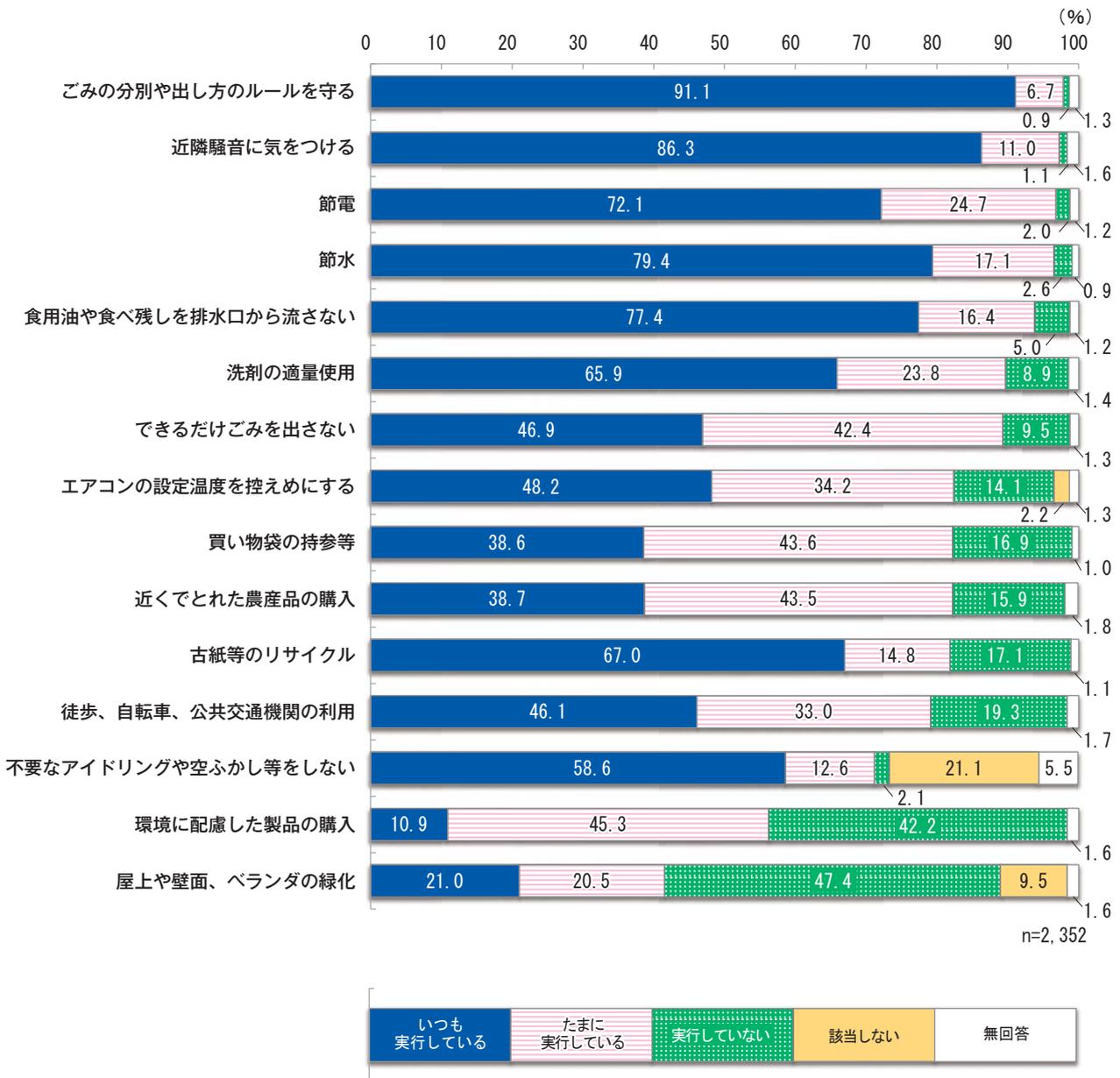
また、日頃の環境保全行動について、『実行している』（「いつも実行している」「たまに実行している」の合計）と回答した人の割合は、「ごみの分別や出し方のルールを守る（97.8%）」「近隣騒音に気をつける（97.3%）」「節電（96.8%）」「節水（96.5%）」「食用油や食べ残しを排水口から流さない（93.8%）」の項目では9割以上となっています。全15項目中13項目が7割を超える実施状況となっており、環境保全行動の定着も進んでいることがわかります（図表2）。『実行している』人の割合が低い「環境に配慮した製品の購入（56.2%）」「屋上や壁面、ベランダの緑化（41.5%）」においても、『今後実行したい』（「実行したい」「どちらかといえば実行したい」の合計）と回答した人はそれぞれ82.4%、68.8%と実行意欲は比較的高くなっており、今後実行に移すことが期待されます（図表3）。

一方、行動する人とならない人とで二極化しており、その一つの要因として、環境問題を身近なものとして捉えられていないという現状があります。そのため、日常生活と環境問題の関わりに気づくことが必要です。また、若者を中心にソーシャルメディアが普及するなど、情報伝達ツールが発達する中、情報が溢れ過ぎて、反って環境に関する情報に触れる機会が少なくなっていることも懸念されます。

（図表1）  
東日本大震災前後の意識の変化

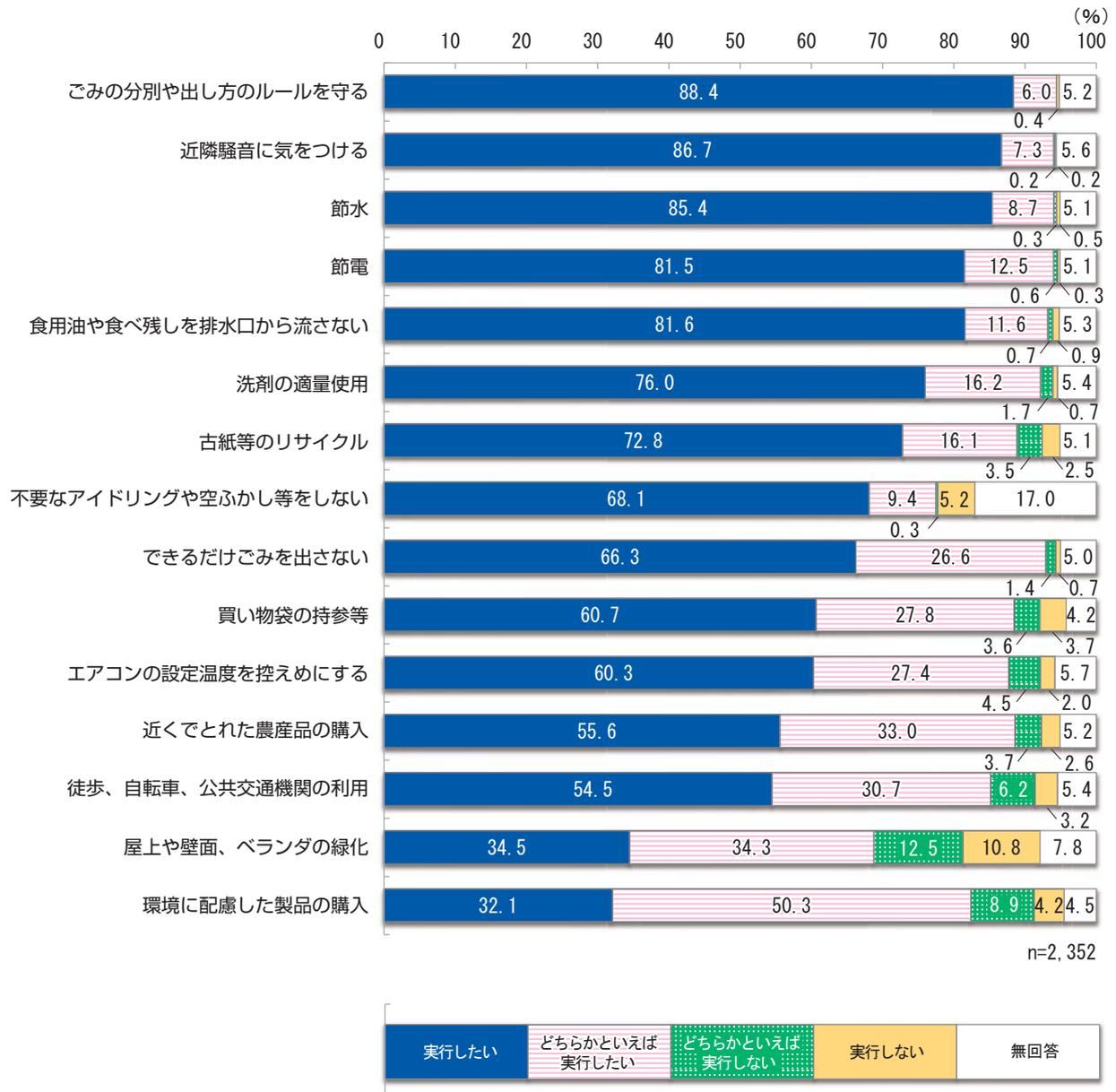


(図表2) 市民の環境保全行動の実施状況



【出典：平成24年度 市政に関する意識調査、福岡市】

(図表3) 市民の環境保全行動の今後の実施予定



【出典：平成24年度 市政に関する意識調査、福岡市】

●福岡市の人口構成の特徴（1） - 若年層・高齢者 -

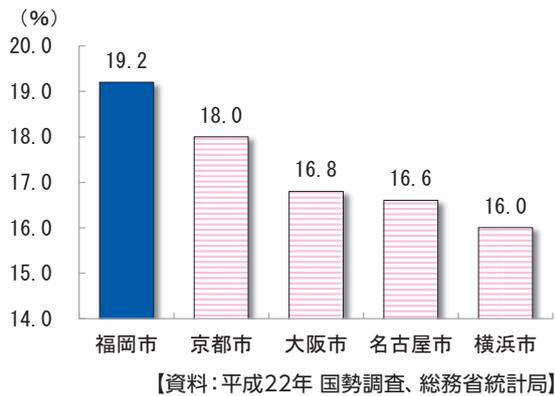
環境教育・学習は、あらゆる世代で取り組んでいくことが重要であり、幼児期に対しては感性を育むプログラムを充実するなど、ライフステージの段階に応じた生涯を通しての環境教育・学習が大切です。

その中でも、福岡市の人口構成の特徴として若者が多いことが挙げられ（図表4）、若年層への啓発は重要な課題となっています。「平成25年度家庭系可燃物組成調査」によると、若者の単身世帯が多い地域では、排出されたごみの中に含まれるリサイクル可能ごみは、他の地域に比べて多く、リサイクルの推進やごみ出しマナーを守ることをはじめ、環境配慮の意識を高める必要があります（図表5）。

また、「福岡市の将来人口推計（基礎資料）」から、今後は人口に占める高齢者の割合も増加していくため（図表6）、こうした若者や高齢者が地域とつながり、環境保全活動に取り組み、活躍することがますます重要です。

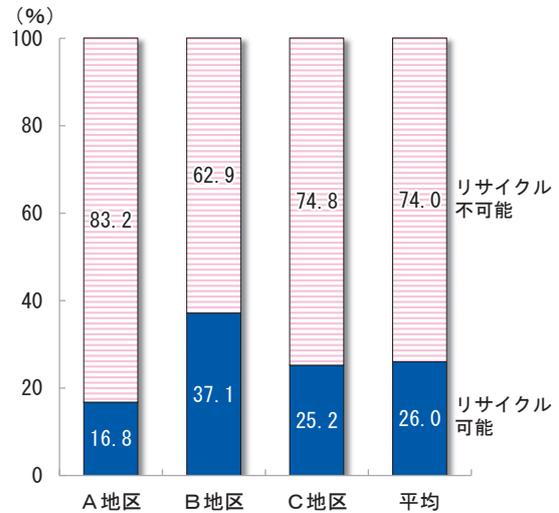
（図表4）市の人口に占める若者世代の割合

特別区及び政令指定都市の中で、人口に占める若者世代（15～29歳）の割合が最も多い。  
（23特別区、20政令市）



（図表5）若者のごみ出しマナー

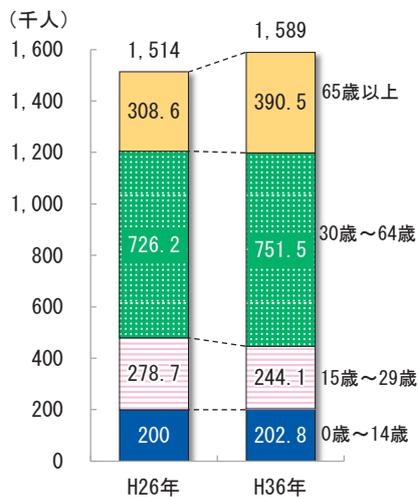
若者の単身世帯が多いB地区では、排出された可燃ごみに含まれるリサイクル可能物の混入割合が、他の地区に比べて高い。また、不燃ごみが混入しているものも多く見られる。



- A地区：戸建住宅が多い。  
65歳～74歳の高齢者が多い。
- B地区：都心部で単身世帯が多い。  
20～30歳代の比率が高い。
- C地区：共同住宅が多い。  
年齢別構成人口は、福岡市の平均に近い。

【資料：平成25年度家庭系可燃物組成調査、福岡市】

（図表6）市の将来推計人口構成



現人口と計画期間である平成36年の推計人口を比較すると、総人口は増加の見込みである。特に65歳以上の人口が増加し、およそ4人に1人の割合となる推計である。

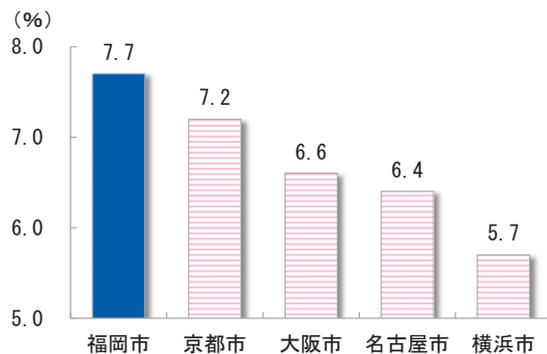
【資料：福岡市の将来人口推計（基礎資料）（H24）、福岡市】

## ●福岡市の人口構成の特徴（2） - 転入者・外国人 -

福岡市は転入者や外国人が多いことから（図表7、8）、ごみ出しなどの基本的なルールを理解して実践するとともに、福岡市の環境について知り、愛着を持つことで、環境マインドを育むことも必要です。また、積極的に地域での活動に参加し、自らの環境に関する気づきを発信・共有することで、地域の環境活動などに活かすことも期待されます。

（図表7）人口千人あたりの転入者の割合

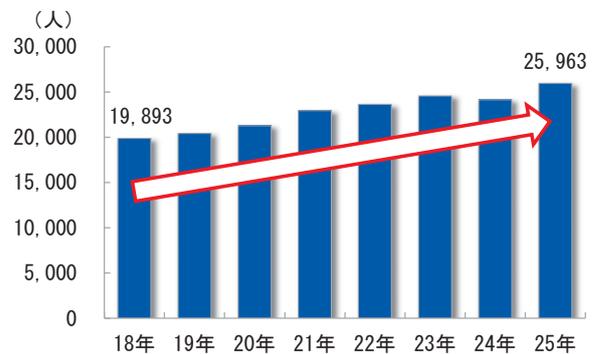
特別区及び政令指定都市の中で、人口千人あたりの転入の比率が最も高い。（23特別区、20政令市）



【資料：住民基本台帳（H24）、各市】

（図表8）外国人人口

福岡市の外国人人口は増加している。



【資料：住民基本台帳（H25）、福岡市】

さらに進めて

課題を克服して

### 10年後の市民の姿

- 環境問題を身近なこととして捉え、日常の生活と環境問題との関わりを認識しています。
- 日頃から実行している環境保全行動について、引き続き取り組んでいます。現在実行できていない環境保全行動についても、積極的な実行意欲を持ち、日常的に実行するようになっています。
- それぞれのライフステージに応じて、環境教育・学習に取り組んでいます。
- 若年層がごみ減量・リサイクルをはじめとして、広く環境配慮の意識を高め、取り組みを行っています。
- 若者や高齢者が地域とつながり、環境保全活動において活躍しています。
- 転入者や外国人が、ごみの出し方などの基本的なルールを理解して実践しています。また、福岡市の環境について愛着をもち、地域の環境活動にも参加しています。



## 市民の取組み —環境教育・学習が目指すこと—



**「学ぶ」** 「学ぶ」とは、自主的に環境についての正しい理解と認識を深めることです。自然や地域の環境、地球環境について学ぶことで、環境から多くの恩恵を受けていることを認識するとともに、地域の環境への関心が高まり、また一人ひとりの生活と関わる身近な問題として環境問題を捉えることができます。資源・エネルギーの有限性について学ぶことで、将来の世代について考え、環境に負荷を与えない商品の選択ができるようになります。



「撮影者: Fumio Hashimoto」

例えば地域の環境について学ぶとき、「博多湾」の環境について着目すると、多様な魚類や底生生物、野鳥などについて知ることができる一方で、水底質からは博多湾の抱える環境問題がわかります。博多湾の環境を守るためには、生活排水や工場排水などを考えるとともに、河川の保全や森林の保全に取り組む必要があります。上流から下流まで、自然や人々の営みに至るあらゆる観点で環境問題について考えることにつながります。

**「ふるまう」** 「ふるまう」とは、学んだことを個人のレベルにおいて行動に移すことです。



緑のカーテン

例えば、節電などの小さな心がけの積み重ねにより、平成22年度から平成25年度にかけて、福岡市(※)の電力使用量は約5%減少していますが、依然として福岡市は九州全体の電力使用量の14.2%の電力を占め、1人あたりの電力使用量は九州の平均より多くなっています。

照明をこまめに消す、エアコンの設定温度を控え目にするなどの節電の取組みや、クールビズや緑のカーテンなどの季節に応じた工夫、省エネ家電やエコカーへの買い替え・グリーン購入など、各々ができることを考え実施していくことが、全体の環境負荷の低減につながります。(※九州電力株式会社の福岡都市圏4営業所の合計した販売電力量)

**「行う」** 「行う」とは、みんなが協力して環境保全活動を推進することです。清掃活動やごみ減量・リサイクルの活動など、地域では誰でも参加できる活動がたくさん実施されています。また、企業や市民団体は地域住民に呼びかけて、自然環境保護活動などを行っています。日頃からこうした情報を市政だよりやインターネット、チラシなどから収集し、積極的に参加することで、他の参加者と交流し充実感や達成感を得ることができます。

**「つなぐ」** 「つなぐ」とは、地域・世代を超えた人々に、より良い環境をつないでいくことです。個人が学んだことや取組みについて家族で話すことから、隣近所、地域へと広げていくとともに、親から子、子から孫へと環境への想いを伝えることが大切です。また、環境について語り合うワールドカフェのような機会に積極的に参加することにより、地域や世代、立場を超えて、環境への想いや取組みをつなげていくことができます。

### コラム

福岡市環境行動賞では、福岡市における環境の保全・創造に高い水準で貢献し、顕著な功労・功績のあった市民団体・学校・事業者と並んで、市民一人ひとりの取組みについても表彰し、広く発信しています。長きにわたり地域の清掃活動を実施している方、校区リサイクルステーションの管理運営に取り組んでいる方、海岸の白砂青松の維持保全に尽力している方など、平成26年度までに318名の方が個人の部門で受賞されています。



第7回 福岡市環境行動賞表彰式